
君はNPC？

理祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君はNPC？

【Nコード】

N8653X

【作者名】

理祭

【あらすじ】

剣と魔法とモンスターの世界。小さな村に住むわんぱくな少年カリュは、ある日、森の中で不思議な生き物と遭遇する。その出会いは彼の思いもしなかった事件を巻き起こし、少年が村から旅立つきっかけになった。自分たちをPCと名乗る人々と、彼らからNPCと呼ばれる人々の生きる世界の物語です。

はじまりの日 1

うつそうと生い茂った森の、少しひらけた場所には隙間から陽の光が差し込み、柔らかな雰囲気をかもしだしている。

かたわらには小川が流れ、何匹かの魚が泳いでいた。川べりにはちょうど腰を下ろすのに適した岩も散らばっていて、疲れた旅人が息をつけるのにいかにもよさそうな風情だった。

森を突っ切って村と街をつなぐ街道には、自然とそうした憩いの場所が生まれるものだ。

そこに集まるのはなにも旅人だけではない。水を飲みを訪れた小型の草食動物、それを狙って現れる肉食性の動物。森の生態系の縮図そのままに様々なものが入れかわり立ちかわり姿を見せる。

そして、人もまたその食物連鎖に連なる一つでしかない。

今、水辺には一匹の存在があった。

背は低い。ずんぐりとした体躯に土気色の肌をしている。二足歩行だが背中を丸めた前傾姿勢で、凶悪な顔つきには理性の色が薄い。それはゴブリンと呼ばれている、この世界でよく見られる生物だ。その存在についてはよく知られている一方、詳しい生態には謎の部分が多い。理由ははっきりしていて、それらと出会ったのうのと調査をしていられないからだ。それらは人類とはっきりと敵対する関係にある。

人類が火をおこし、文字を得たそのころからすでにそれらについての記述が残っている。それらは人に仇なす数多くの存在、そのなかでもっともポピュラーな存在とされてきた。歴史上、人類がまだ種としてひ弱だったころには、それらに追われ、狩られていた時代

もあるという。

文明が発達した今でもそれらが危険な存在であることに変わりはない。一時の休息を得ていた旅人がゴブリンに襲われ、被害にあうような事件は決して珍しくなかった。

ゴブリンは獲物を探す視線で周囲を見渡している。手に子ども足ほどもある太さの棍棒を持って、もう一方には無骨な盾を携えていた。身体には革をなめした胸当てを身につけている。それらが人類と同じく社会的な生き物であり、独自の文化を持っていることは広く知られていた。

鼻を利かすようにうごめかすその姿を木蔭から見つめている二対の瞳がある。真剣なものと、それを隣で呆れるように眺めている眼差しは、どちらもまだまだ幼さが残っていた。

「ねえ。カリユ、ほんとにやる気？」

呆れたような視線の主が、呆れたような声で言った。

「やる」

それに短く応えた声には強い決意がこもっている。

声の主は少年だった。カリユという。年のころは十才ほどで、実際にはまさしくついこのあいだ十才の誕生日を迎えたばかりだ。年相応に小柄な体つきをしている。ゴブリンとどっこいどっこいといったところだった。もちろん体格では比べ物にならない。倍まではないが、ゴブリンと少年の腕のたくましさにはそれに近い差があった。

「こっそり見つからないように帰ればいいのに……」

不満そうに言うのは、栗毛の髪をサイドで結んだ少女。同じ年ごろに見えるが、上背は隣の少年よりもある。このころの男女なら生まれが同じでも女の子のほうが成長がはやいのが一般的だが、彼女はそれに加えて少年より一つ年上だった。

二人は村で隣同士の家に住んでいる。両親たちは互いに仲がよく、日々を仕事に追われる手間を少しでも軽くするために、二人は姉弟のように一緒に育てられていた。

「なんだよ、ジニイ。あんなやつがうるついでさ、村まで来たら危ないじゃんか」

「迷いゴブリンでしょ。来たりなんかしないわよ」

ジーニアスというのが本来の名前の、その愛称で呼ばれた少女は半眼で答えた。

生まれたその日から一緒にいるこの男の子に、彼女は自然と姉としての気分を抱いている。向こうみずで考えなしのカリュをいさめるのは、いつでもどこでも彼女の役目だった。

「そんなのわかんないだろ」

口を尖らせる弟分に彼女は言った。

「村まで来るなんていうのだって、わからないでしょ」
それに、と続ける。

「もし村に近づいてきたりしたら、その時はお父さんたちがどうにかしてくれるもの」

「どうにかつてなにさ」

「追い払ってくれるってこと」

はぐれモンスターの扱いくらいであれば、村の大人なら誰でもわきまえている。そうでなければ村を成り立たせることなどできなかつた。

「父ちゃんたちが村にいなかったらどうすんだよ。あいつがいつ村に来るなんてわかんないのに。ここで見失ったら、あいつ、応援を呼んでたくさんでやってくるかもしれないぞ」

ジニイは大きく息を吐いた。

昔はあんなに素直だったのに、日に日に口ばかり達者になるんだから。チビな背丈を少しでも伸ばしてこちらをにらみあげるカリュをにらみかえすが、強情な彼女の弟は退こうとしない。もう一度

ため息をついて、ジニイは遠ざかろうとするゴブリンの後ろ姿に視線を移した。

このままどこかに行ってくれるのなら問題ない。今の季節は森の実りも豊富だから、モンスターが村までやってくることはほとんどありえない。

ただ、もしカリユの言うとおりだったら？　ゴブリンの向かう先は森を通る細道で、それはそのまま村まで続いている。あのゴブリンは村の様子を見に来たのかもしれない。もしかしたら、味方の襲撃に先駆けた偵察のような役目だったりするかも。

いずれにしても、村の大人に知らせる必要があった。ジニイは決断した。

「カリユ。あたしがあいつの後を追うから、あんたは森を先回りして村に　　って」

彼女の言葉をきかず、少年はすでに足を踏み出している。

「こら、カリユっ！」

大声をだしてしまいそうになり、振り返ったカリユに人差し指でしーっと合図されてしまう。

あわててゴブリンの様子をうかがい、なんとか気づかれていないことを確かめて、ジニイはカリユのあとを追った。服をひっぱって押しとどめる。

「もう、勝手に一人で行こうとしないで」

「大丈夫だよ」

なにが大丈夫だ　　言いかけて、相手の自信満々の表情を見たジニイはいっぺんに文句を言う気がそがれてしまう。ほんと、馬鹿なんだから。全然よわっちいくせに。

「……無茶しちゃダメだからね。あたしが逃げるって言ったら、絶対逃げるよ」

「わかってるよ。大丈夫、俺たちならやれるって」

「はいはい。じゃあ、いつもの場所の近くまで後をつけて、仕掛けるのはそれからよ。もしこのまま村から離れるようなら、それでおしまい。いい？　ちゃんと約束して」

「わかってるってば。いいからほら、急ごうぜ。見失っちゃう」

「ほんとにわかってるんでしょうねえ」

ひそめた声でやりとりを交わしながら、二人は追跡を開始した。

ゴブリンは森の街道を出たり入ったりを繰り返しながら、少しずつ彼らの村のある方角へと向かっていった。街側ではしっかりと整備された道も、半ばを過ぎて村に近づくほどに小道とっていいほど自然にとけこんだものになる。ゴブリンと鉢合わせる誰かがいまだにあらわれていないことは幸運といえた。

二人の追うゴブリンの動きはふらふらしていて、ジニイは相手の目的を読むことができない。やはりただのさまよひ者のように見えるが、周囲を探索しつつ村に向かっていているようにも思えた。

動ぐりすぎているかもしれないと考えたが、ゴブリンが村に近づいていることは確かだった。

ちらりと隣を見れば、自分の判断を誇るようにこちらを見る眼差し。むむっとしたが、そこでなにか言うのもなんとなく負けたような気がして、かわりにジニイは言葉を短く告げた。

「……しょうがない。やろう」

「やたっ」

ぱあつと満面の笑みを咲かしてガッツポーズ。昔からなにも変わらない、子どもっぽい反応に口元をゆるめかけたジニイは、あわてて表情をひきしめた。

相手はゴブリン。たった一匹とはいえ、子ども二人が立ち向かうには危険な相手だ。連れが考えなしですぐ特攻してしまうような性

分である分、彼女は普通以上に慎重になる必要があった。

村の近くにはモンスターの襲撃に備えて、色々と仕掛けがある。村周りの掘りや柵といった直接、相手を防ぐものに加えて、森のいたるところに張られた早期警戒のための鳴り物もそうしたものの一つだった。

なかにはもつと積極的に、相手を撃退するための仕掛けもある。彼らはいつものように、それを利用するつもりでいた。

「それじゃ、あたしが仕掛けるね」

「なんでだよ」

一気に不機嫌に転んだ声でカリユが異を唱えた。

「だって、危ないじゃない」

「だから、なんで危ないことをやるのがジニイなのさ」

「そんなの。あたしがお姉ちゃんだからに決まってるでしょ」

見上げてくる視線に向かって彼女は当然とばかりに言い切った。しまったと思った。彼女の目の前で、きつと相手の眉がつりあがった。

「そんなこと、知るもんかっ」

「ちょっと。大きな声ださないで」

「俺がやる、俺は子どもじゃないんだっ」

「わかった。わかったってば。もう、なにかあると大声だすのやめてよ、子どもみたい」

「また言った！ だから、子どもじゃないって」

「あーもう！ うるさい！」

カリユ以上の大声でジニイが言い返した。

「そんなんだから子どもだっていうんでしょ！ バカ！ バカリユ！」

「子どもじゃない！ かけっこだってもうジニイよりはやいんだからなっ」

「ふんだ、腕相撲じゃあたしより弱いくせに！」

「うるさい！ 怪力おんな！」

「なあんですつてえ〜」

がさり。

森の茂みを揺らした物音に、ぴたりと言い合いがとまる。

二人はそつと自分たちの頭上を見上げた。そこにいつからか影が覆っている。影をつくりだした相手が、感情のない真つ黒い瞳で二人を見下ろしていた。

近くで見ればさらに恐ろしげなその顔つき。水気を失ってひび割れた皮膚の細部まで見ることできる近さにあつて、三者のあいだに不自然な沈黙が生まれた。

かちや、となにかが擦れる硬い音を耳にした瞬間、カリユはジニイの身体を突き飛ばしていた。

「逃げる！」

吐いた息を反動にして、自分も後ろに飛ぶ。二人のあいだを轟音を立ててなにかが振り下ろされた。

重さのある砂を噛む音。鈍色の凶器が短い草の生えた地面を叩いた。

持っていた棍棒で二人を打ちつけようとしたゴブリンが、奇襲に失敗して不服げに歯をむいた。口元からしたたったよだれが糸をひいて落ちた。

しずくが地面に落ちるその様子までしつかりと目にとらえて観察していたカリユは、その奥の光景に顔をゆがめた。彼に突き飛ばされて難をのがれたジニイが、目の前の出来事に呆然としたままでいる。

逃げるって言ったのに、馬鹿ジニイ！

彼女に気づいたゴブリンが腕を振り上げようと力を込めるのを見て取って、カリユは腰に巻いた小物袋へ手をつっこんだ。手ごろな大きさを探り、そのまま握り締めて、思い切り投げつける。

適当に掴んで放ったつぶての幾つかがゴブリンの顔面を直撃した。目のあたりをおさえ、苦悶の声をあげて暴れるモンスターの前を身を屈めて横切って、カリユはへたり込んだままのジニイを強引に引き起こした。

「立って！」

叱責に、はっとジニイの目の色に力が戻った。うなずいて立ち上がった拍子に手にしていた木のかごを取り落とす。中に入っていた木の実が盛大に地面に散らばった。

「あつ」

「そんなのいいから！ ほら早く、いくよっ」

手のひらをしっかりと握り締めて走り出した。掴んだジニイの手が震えている。あるいはそれはカリユのものかもしれないかった。

「カリユ、ごめ」

「俺がおとり！ ジニイは隠れて！」

謝罪の言葉にかぶせて一方的に告げたカリユの台詞に、幼なじみから不満の声はなかった。

背中に遠吠えじみた奇声を受けて、カリユは肩越しに後ろを振り返った。

怒り狂ったゴブリンが、頭から湯気をふきだしそんな形相で彼らを追いかけてきている。恐怖に口元をひきつらせ、それを無理やりに笑みのかたち曲げて、カリユは大きく笑った。

「わは！ きた！」

真っ直ぐ走るのは危ない。直感的にそう判断して、即座に茂みに

突っ込んだ。顔や腕に突き刺さる小枝を払って、さらに茂みの深い方向へと飛び込む。

街道から脇へ入り、奥へ。さらに奥へと向かう。

彼にとつては慣れ親しんだ森だった。こつちに行くべきだ、あつちの方には行くべきじゃない。理屈ではなく体感として肌を感じながら、やがて大人でも十分に身を隠せるほど大きな茂みを見つけたカリユは、ジニイの身体をそこへ押し込んだ。

身を乗り出してなにか言いかける幼なじみの口を閉じて、しーっと合図する。遠くからかきわけて近づく物音に鋭い視線を向けて、ジニイをその場に隠して一人で走り出した。

走りながら、小物袋からまたつぶてを取り出して物音のしてきた方向に投げつけた。適当だったので相手に当たってくれるとは思わなかったが、悲鳴と、怒りの咆哮が森に轟いた。

「こつちだ、こつち！」

あえて大声で自分の位置を宣伝しながら駆けるカリユの言動には意図がある。

幼なじみから注意を引きつける必要があつたし、なによりおとりである彼には相手が追いかけてきてもらわなければ困るのだった。

追いかけてここに興じた時間は長くない。

このあたりの森のことなら、カリユはほとんど知り尽くしている。自分が走りやすい場所、相手が追いかけていく道を選び、それでいて完全には撒いてしまわない距離感をたもつたまま、目的の場所へたどりついた。

一見するだけでは、そこは他と大差ない場所に見える。

伐採して生まれた小さな空間。苗床に朽ち果てた切り株に刻まれ

た印でこの場に間違いがないことを確かめ、微妙な立ち位置を調整しながら、懐に手を入れた。

取り出したのはつぶてではなく、一本の紐だった。使い込まれ、ところどころから繊維のはみだしたそれは、カリユの母親が手ずから編みこんでくれたものだ。

紐の長さはカリユの腕ほどもある。真ん中のやや広くふくらんだ部分に、カリユは大きめのつぶてをあてがった。

折りたたみ、紐の両端を手にもって、つぶてが落ちないように気をつけながら大きく振り始める。はじめは腕全体で、おもりにかかる力で拳動が安定してからは、手首のスナップだけで。

ひゅんひゅんと鋭く風をきりながら、先端におもりをのせた紐が少年の頭上で円を描いた。

茂みが揺れた。

唸り声をあげ、やぶからゴブリンが姿をあらわす。モンスターが一步を踏み出す前に、カリユは右手につかんだ紐、その片方だけを離していた。

伸びきる紐に導かれ、直接投げつけるのとは比べ物にならない速度でつぶてが飛んだ。

スリンガー。投石器は猟師を生業とするものにとっては馴染み深い武器である。習熟にひどく手間がかかるのが難点だが、弓を射る力のない子どもにはおあつらえ向きといえた。

放たれたつぶてはゴブリンに当たらず、その横の木に弾けた。軽くない衝突音がして、幹に決して小さくない痕がのこる。

「げ」

うめいたカリユの思いを読んだように、ゴブリンがぞろりとした牙を見せた。人間にはとても笑っているようには見えない、いびつな笑顔だった。

利点の多い投石器ではあるが、難点も多い。習熟の難しさに伴う命中精度の問題はご覧のとおりだが、この場合は連射が効かないという点がさらに重要だった。ようするに、近距離用の武装ではない。

少年の手から武器が失われたことを見て取ったゴブリンが一気に突進してくる。

それに対したカリユも同じく笑った。

カリユの前の地面には仕掛けが隠されている。布を張り、土と草で覆った落とし穴が大口をあけており、そこに落ちた先には、先端をとがらせた木が無数に上向いているのだった。

情けない悲鳴をあげてゴブリンの姿が消えうせる瞬間を待ち構え、しかしカリユの予想に反してゴブリンは畏の直前でぴたりと動きを止めた。

手にした曲剣で地面をさぐる。布がめくられた。

鼻を鳴らしたゴブリンがカリユを見る。どこか得意げなような表情だった。

「……慎重なやつだなあ」

「相手かぶがぶが言うが、ゴブリン語の素養のないカリユには理解できない。」

上辺だけの会話は続かず、ゴブリンが落とし穴を迂回して迫ってくる。あわててカリユはさがり、大木の後ろへと退いた。

大人が三人で囲まなければならないほどの老木にとっかかりを見つけ、足をかける。身軽さはカリユの身上とするとところだった。あれよあれよといううちに太い幹を登りつめていく。

「！」

下からゴブリンが吠え立てるのを見下ろしながら、さてどうしたものかとカリユは思案した。

落とし穴がばれるというのは想定外だったが、こうしたときのための備えがないわけではない。具体的には、残してきたジニイの存在がそれだ。

彼女はおそらく、今ごろは村に戻っているだろう。それなら、話を聞いた大人たちがやってくるのを待つのが一番だった。

日頃、よく勘違いされているように思うのだが、カリユは決して自分のことを無謀だとかいうふうには思っていないかった。やれることとやれないことくらいはわかまえているつもりでいる。

ちびの自分がモンスターに一对一で勝てるとは思わなかった。必殺の罠があっけなく見破られた以上、情けないが大人の助けを待つべきだとわかっていた。

ゴブリンは木登りが得意ではないようで、うなったり手をかけてきたりはしているが、本腰をいれて登って来る気配はなかった。着込んだ防具に手をかける様子がないことでそれは判断できた。

森の中で太陽の位置はわからないが、日が沈むまではまだしばらくあるはずだった。さて、それまでに助けが来るか、下のゴブリンがあきらめてくれればいいんだけど。後者の場合、もちろんカリユはその後を追いかけて、別の罠まで案内してやるつもりでいた。

そんな算段で、木の上に追いやられたカリユだが、決して気分は暗くなかった。のだが、続いて響いた悲鳴のような声に、顔面を蒼白にする。

「カリユ！」

木々のあいだからジニイがあらわれていた。

その背後に大人たちの姿がない。彼女は村に戻らず、カリユたちを追いかけてきたのだった。

「逃げる、ジニイ！」

ジニイは動かない。

新しい獲物に振り返ったゴブリンをにらみつけて、彼の幼なじみはそこから一步もひこうとしなかった。真っ青で震えているのが遠くからでもわかるが、腰が抜けているわけではない。それがカリユにははつきりとわかった。ジニイは、自分を助けようとしているのだ

ジニイが大きく手をかざした。なにかを受け止めるようにひろげた両手がゴブリンへと向けられる。

「ふぁいあ！」

力ある言葉に呼応して、虚空に炎が生まれた。

ジニイは魔法使いである。生まれながらの才次第ではどんな天変事象をも可能にするような、ただの村人には珍しい才能をもっていた。

とはいえ　　なんの訓練も受けてはいない、見よう見まねの魔法ではあった。大気に満ちたある物質を媒介に生み出されたものは、炎と呼ぶのもおこがましいほどのひ弱ささしかもちあわせていない。ひよろひよろと風に流されるようにして目標に向かった火の玉以下のそれは、ゴブリンの胸当てにぶつかっても焦げ目ひとつ残すことはなかった。

気まずい空気が流れた。

むしろモンスターのほうが申し訳なさそうな案配ですらあった。

「ッ！」

場を仕切りなおすようにゴブリンが吠えた。声にあてられたジニイの腰がくだける。

カリユはすばやく周囲に目を配った。今から木をおりていては間に合わない。老いた木にからまった蔦を見つけて、手早く引き寄せ

てちぎった。軽く体重をかけて丈夫さを確かめると、そのまま一気に木上から飛び出した。

目算もなにもあったものではない。やはり少年は無茶な性格だった。

しかしそんなことはどうでもよかった。いま、カリユの頭のなかにはひとつのことしかない。ジニイを助ける。どうやって？
こうやって！

鳶を手にして勢いよく滑空。

斜めに弧をえがいて、少年の身体は空を泳いだ。

はじまりの日 2

いくら子どもとはいえ、全体重をかけられた鳶が耐えきるかなどわかったものではない。途中で干切れないにしても、なにしろぶっつけの行動である。シミュレーションもなにもない。

一本の鳶を頼りに飛び出して、自分の身体がどのように運ばれるかという計算があったわけでもなかった。そもそも、そのために必要な知識がない。ただ、鳶にぶらさがって飛び出した先に運良くモンスターの姿が近づいてくる幸運を、カリユは普段あまり熱心に祈ったこともない神さまに感謝した。

「ジニイに、手をだすなあああ」

鳶を持ったままでは、直接ゴブリンにまでは届かない。加速の最下点を越え、視点が上向いた瞬間に手を離して、そのまま宙を舞った。

横合いから体当たり。ゴブリンと一緒にたにもつれた。

受けた衝撃は大きかったが、不意をつかれなかった分、カリユのほうダメージは軽減されている。地面を転がってなんとか受身らしいものを取り、ふらつきながら立ち上がった。

「カリユ！」

駆け寄ってきたジニイは涙目だった。

「バカ！　なんで村に行かなかつ」

ただ、と言い切ることができなかった。わきばらに衝撃を受け、カリユは痛みを感じる前に身体ごと吹き飛ばされていた。

息が詰まる。全身がしびれて受身を取れず、顔をこすりながら地面を滑った。土のおいをかぐことがなかったのは、呼吸自体ができていないからだ。遅れて響いた激痛に身悶える。

「カリユ！」

涙にぬれた視界に、自分に駆け寄る幼なじみの姿が見えた。その後ろに、奇襲を受けて平然とした顔のゴブリン。

「カリユ、カリユ！」

助け起こされながら、いまだに呼吸はととのわず、息もたえだえにカリユはジニイに告げた。

「……火、出して」

「はやく　はやく逃げようよう」

「だせ！」

びくりと肩を震わせたジニイが、目を閉じた。ぽうつと頼りげのない火の玉が生まれた。

それを見たゴブリンが愉快そうに歯を鳴らした。速度もなければ威力もない。追い詰めた獲物を前にして、完全にあなどった態度だった。

上等だ。歯を食いしばり、カリユは立ち上がる。ふらりとよろけそうになるのを横から支えられ、つつけんどんに突き放した。

「ジニイは村にいつて」

「カリユ……」

「大丈夫」

にやつと笑う。完全にまるつきり、どこからどうみても強がりではない笑みだった。

「戦利品、持って帰るからさ。　できれば誰か呼んできてくれたら嬉しいけど」

はつと気づいた様子で、ジニイが唇を噛み締めた。うなずく表情に後悔の影がさすのを吹き飛ばすように少年はもう一度笑った。

「ほら、いつてー！」

言いながら、自分はゴブリンにむかって駆け出した。

手には取り出したつぶてがいくつか。腰の袋はすでに空っぽで、弾はいま握った分だけで全部だった。

予備動作が必要なスリンガーは使えない。痛みのある身体では投てきも満足にできやしない。いや、たとえカリユの五体が満足でも、たかたが子どもの力で投げつけた石ころでは、よほど幸運に恵まれない限り相手を昏倒させることはむずかしかった。

そんなやぶれかぶれに、命を賭けるわけにはいかない。自分のものだけならまだしも。今はまだ、すぐ近くにジニイがいるのだから。

少年を迎え撃つようにゴブリンが棍棒をかまえる。その途中、ふよふよとたよりなく宙をいく火の玉が見えた。相手との直線上にあつて邪魔なそれを、カリユは虫を払うようにあいた左手で握りつぶした。

貧弱とはいえ、火である。てのひらに激痛が走った。視界がにじむ。

しかし、ぬぐえば敵が見えなくなる。目を閉じれば隙ができる。だからカリユは涙を流しながら歯をくいしばつてその痛みを耐え、渾身の力で右手を振りかぶった。

つぶてが放たれる。

ゴブリンはあっさりと盾で防いだ。

棍棒での反撃。大上段からの打ちおろしで振り下ろされる。

ぎりぎりのところで避ける。手持ちの武器を使い果たしたかに見えるカリユは、そこからさらに踏みこんだ。加速して飛び上がる。

右手に残ったつぶてはない。徒手で殴り合おうという無茶でもない。それよりはもう少しだけ、ましな考えだった。

武器ならまだ残っている。

それを、カリユはさきほど手に入れたばかりだった。

重い棍棒で地面を打ち、前のめりにゴブリンの頭がさがっていた。もともと小柄なこともあり、その顔面はカリユの身長でも手が届く範囲にあった。

カリユは腕を振るった。

振るわれたのは利き腕でもなければ握りこぶしでもなく、掌ていのふうになっているのは、拳が傷むのを避けたからでもなかった。手のひらに包んで燃える火の玉以下のそのかたまりを、カリユはゴブリンの目めがけて押しつけた。

耳をつんざくような悲鳴がほとばしった。

貧弱とはいえ、火。生木を燃やすどころか、枯れ木相手の火種にもなりそうにないそれだったが、さすがに目にぶつけられてはただではすまない。

とはいえ、ダメージは期待できない。せいぜいびっくりさせて、ひるませるくらいが関の山だった。

息をつく間も惜しみ、カリユは無防備に急所をさらした相手の股間を蹴り上げた。

今度こそ痛みによる悲鳴。右手の武器をとりおとして、ゴブリンはその場につずくまいった。

地面の棍棒を遠くに蹴り飛ばし、カリユはすぐそばに垂れ下がった蔦をつかんでゴブリンの足に結んだ。その腰に短剣を見つけ、手を伸ばす途中でゴブリンが腕を振るった。

片腕でなぎ払われ、ごろごろとカリユは地面を転がる。

「へへっ」

立ち上がったその口元に笑み。手には間一髪、ゴブリンの腰から手に入れた短剣が鞘ごと握られている。

「っ」

「やだよ。返してほしければ、かかってこいよ」

憤慨した形相に挑発した口調で応えながら、ちらりと背後の様子をうかがった。

ジニイの姿はない。森をいく足音も聞こえない。

よし、とカリユは安堵の息を吐いた。これで最低限、果たすべき目的はクリアした。

さあ、どうする。逃げる？ それとも

胸中の問いに、少年は無言で鞘から短剣を抜き払った。

「おのこよの」

不意に響いた言葉に、ぎよつとカリユは周囲を見渡した。

誰の姿もない。声ももうない。幻聴か、と思ったところで、ゴブリンが吠えた。

「！」

突進してくる。少年の油断をついた格好だが、数歩走ったところで結われた蔦につんのめった。

態勢を崩したゴブリンの隙を見逃さず、カリユは飛び掛った。

腰だめにかまえた短剣で、身体ごとぶつかる。

狙いははずれようがなかった。胸当ての脇をねらった短剣の刃がモンスターの身体に突き刺さる。

しかし、それでもその一撃は、致命傷にはほどとおい深さでしかなかった。

「！」

至近距離で振るわれた拳がカリユの身体を吹き飛ばした。

意識がとびそうになるのをこらえて、身体を起こす。張られた頬が熱かった。口の中に血の味が広がっている。手には短剣がなくなっていた。

「おろかでもある。連れの逃げる時間をかせぐのが目的だったはずなのに、どうして逃げださんかった」

再び、声。今度はカリユは意識を揺さぶられなかった。

幻聴か、あるいは森で人間を惑わすという妖精のささやきか。確かに耳に聞こえるその声を無視した幼い眼差しは、一心に目の前のモンスターに向けられている。

怒り心頭のゴブリンが、自分の血に濡れた短剣で鳶を切り払った。

さあ、どうする。

あやしく響く声とはなんら関わりなく、この場に至って、逃げ出すという選択肢はカリユにはなかった。

畏はばれ、武器はつき、目の前には傷ついてなお強大な敵が立つ。それでも自分を奮い立たせるものがなにか、カリユはふと不思議に思ったが、深くは考えなかった。

身体の奥に熱いなかたぎっている。それをなんと呼ぶものか、知っている気がした。

父が、祖父が言っていた。

なにがあっても、それだけは決して失くすなど。

女を守る。モンスターと戦う。男が男であるために必要な、その偉大な感情の名は

「あほう。そんなものは勇氣といわん。蛮勇というのよ」

声に、わずかに怒気がこもったように聞こえた。

ゴブリンの咆哮。

カリユも雄たけびをあげて応えた。今度こそなんの策もない徒手空拳。握った拳でゴブリンに立ち向かい、その目の前で、不意にゴブリンの全身が火を噴いた。

「……………！」

火柱が荒れ狂い、熱気がカリユの髪を灼く。

やがて火が収まったあと、声もなく崩れ落ちたゴブリンは完全に炭化してしまっていた。皮膚を焼く程度ではない。ジニイの生んだものとは比べようもない、圧倒的なまでの火力。

ぞつと身を振るわせたカリユは、見知らぬ何者かが立っていることに気づいた。

麻織りのローブに身を包んだ、旅人の装いをした人物だった。フードに隠されて顔までは見えなかったが、流れるような銀髪と浅黒い肌がのぞいている。声で女性だということはわかった。

「あ、ありがとう　ございます」

冒険者。魔法使い、本物の。恐れと感謝をないませにして頭をさげるカリユに、その女性はふんと鼻を鳴らした。

「ぬしゃあ、こんなことをいったい何度くりかえしておるのかよ」「え？」

質問の意味がわからず、きょとんとする。苛立たしそうな舌打ちが聞こえた。

「……まあいいわ。このあたりで腹に怪我をした女を見んかったか？　竜でもかまわん」

竜。そんな大層なモンスターなど、見たことがあるはずがない。

激しく首を振るカリユに、女性はならどうでもいいとばかりに背中を向けた。

「はよう帰れ。女を泣かすな。せつかく助けてやった今生ぞ。ありもしない頭で考えられるなら、次に捨てるときはもう少しマシに扱おうがいい」

言い捨てて、女性は森の奥へと消えた。

残されたカリユはしばし呆然と女性の消えたやぶを眺めて動けずにいた。

緊張がとぎれたせいで頭が働かない。

どうやら命拾いをしてらしいという実感も沸かず、全身には奇妙な空虚感があった。敵を倒したのは少年ではないのだから、それも当然かもしれない。

どれほどのあいだそうしていたか。

自分の名前を懸命に呼ぶ声を遠くに聞き、カリユはようやく茫然自失の状態から回復した。

ジニイの声だった。大人たちもいる。村から助けがやってきたらしかった。もう、その必要はなくなってしまうていたが。

村の方角へのろのろと歩きはじめ、その途中で思い出したようにゴブリンを振り返った。

モンスターのは死骸は完全に消し炭と化してしまっている。戦利品など手に入る様子ではなかった。

そのことに残念さをおぼえるのでもなく、カリユはその場から離れてジニイたちとの合流をはかった。

もう一度振り返る。執着はゴブリンではなく、そこで出会った旅人、正確にはその言い放った台詞に残っていた。

ほどなくしてジニイに引き連れられた大人たちと合流したカリユは、さんざんに叱られた。

父親がわりのジニイの父親から思い切りどつかれ、村に帰ったら親父さんからもっと殴ってもらえとおどされてげんりとなる。

しかし、村の大人たちはカリユの身を案じてのことだったから、それがわかるカリユはごめんなさいと頭をさげることしかできなかった。

彼が一番対処に困ったのはジニイだった。

涙をいっぱいのためにためて抱きついてくるジニーをもてあましながら、カリユは危ないところを冒険者風の相手に助けられた事情を大人たちには話した。

今日、カリユが出るまで、村にそうした冒険者は来ていないはずだった。自分がいないあいだに訪れたのかと思っただが、大人たちはそんな人物は宿にも来ていないという。

ということは、これから来るのか。それとも近くに寄っただけかもしれない。

寄ってくればお礼をするんだがなあ、と残念そうな大人たちに囲まれて護られながら、カリユとジニーは村への帰路についた。

お礼。そう言われて、それならまた話ができるかなと考える。もちろん、当の本人がまずお礼を言わないといけないのだけでも。

しかし、カリユにはそういうことにはならないような気がしてならなかった。

もう自分はある人と出会えないという予感があった。

理由はない。なぜそんなふうに思うのかもわからなかった。勘と
いうしかない。

そして、それを残念とも、やはりカリユは思わなかった。

頭ではさきほど聞いた台詞、そのなかの単語が強く残っている。

竜。

竜が、いる？

はじまりの日 3

村に帰って父親からげんこつをもらったあと、カリユは涙目でふたたび森にもどっていた。

みんなを心配させた罰として枝拾いを命じられたのだった。ついでにジニイが落としたかごも中身ごと拾ってこいといわれている。

一緒に怒られるべきのジニイは一言も怒られず、村で家事の手伝いをするように言われていたから、これは絶対にジニイひいきだとカリユは思うのだが、ゴ布林を二人で追いかけるようにいったのは自分だったから文句はいえなかった。

近くにはまだはぐれモンスターがいるかもしれないなかった。本当にあれがはぐれであつたかどうかわからない。村の大人たちは手があいたもので森に見回りにでていた。

モンスターがふらついているかもしれない状態で森にいかされるのは、カリユ一人であればすくなくとも逃げ出すことはできるといふ信用であるはずだったが、当の本人はそうは思っていないかった。

どうせ怖い目にあえばいいと思ってるんだ。ふてくされた気分を考える。

痛みをかんじて見おろした左手には包帯がまかれている。ゴ布林と対峙したとき、ジニイの放った火の玉をつかんでできた火傷は、母親の手から薬草をぬられていた。

包帯をまきながら眉をひそめて黙っていた母親の表情を思い出し、なんともいえない罪悪感におそわれる。

仕方ないじゃないか、とカリユは内心で言い訳をはじめた。

ほかに武器がなかったんだ。ジニイが逃げ出す時間をつくらなければならなかった。ジニイをまきこんだのはたしかに、自分だったのだから。

だから、手でにぎりしめたくらいでは消えないとわかっている火の玉をつかって、ゴブリンの顔面にぶつけてやった。べつにつくりたくってつくった傷じゃない。必要だったから、そうしたんだよ。脳裏にうかんだ母親の顔は、悲しげなままなにも言わない。実物と同じだった。

カリユの母親はいつも、彼が怪我をして帰ってきてきてもなににも言わなかった。ただ黙って、自分がその怪我をして痛いような表情で治療をしてくれる。

その顔を見るたびにカリユはもうしわけない気分になる。

けれど怪我をしたのにはいつだって理由があったから、でもそれを口にしたって母親の表情が変わるわけではないこともわかっていながら、カリユも黙って手当てをうける。

しょうがなかったんだよ。口にできなかった言い訳をカリユは続ける。男なら言い訳をするなど父親からきつくいわれていたから、彼はそれをぐつと我慢していた。

どうして逃げ出さんかった。

無言のままカリユを非難する想像の母親にかわって、声がひびいた。

顔もおぼえていない（ローブに隠れてほとんど見えなかったから、当然だった）魔法使いの言葉。まるで彼の母親の気持ちを代弁するように、声があった。

そんなものは勇氣といわん。蛮勇というのよ。

むずかしい言葉はよくわからなかった。

あの時、カリユはなにを考えたわけでもなかった。火の玉をつかった奇襲が成功して、そのあと。

たしかに逃げ出すことだってできただろう。カリユは逃げ足に自信があつた。ゴブリンを足止めして、そのまま村にかえって大人たちに助けをもとめることもできたし、べつの罾のところにつれていくのもいい。

それをしなかったのに、理由があるわけではなかった。

なんとなくそうするべきではないのかと思つた。カリユの心でなにかがささやいた。そうとしか思えないほど自然に、身体が勝手にうごいていた。

あの魔法使いは、まるでそれを怒っているような口ぶりだった。

……よくわからない。よくわからないし、不満もいっぱいだったが、それで母親に悲しそうな顔をさせてしまったのはそのとおりなので、そのことをカリユは反省した。

次はうまくやろう。罾も、逃げ方も。

ああ、ゴブリンくらい、格好よく正面から倒せるようになりたいなあ。

ちびで非力なカリユは考える。彼の腕はほそくて、弓をひくことも剣を振ることも満足にできなかった。子どもでもモンスターを倒せるのがスリンガーの強みだが、十分に重さと速度をのせるチャンスは早々あるわけではない。

それか、魔法とか。

さつき見たばかりの光景をおもいだして、カリユは全身をあわだてた。恐怖と興奮が一気によみがえつた。

天をつき、そのまま森を燃やし尽くさんとする炎の柱。それでいてゴブリンだけを正確に燃やし尽くしたあれこそが、まさに魔法の業というべきしるものだった。

幼なじみの放つたような、手につかめる火の玉なんて比べ物にならない。

魔法さえ使えれば、非力かどうかなんて関係ない。カリユは熱望

してやまなかつたが、どうあがいても無理な願いでもあった。魔法とは生まれながらにして、素養のあるなしがはっきりしているからだった。

どうして自分は魔法をつかえないんだろう。

昔はそのことを怨み、悪くもない両親に泣きながら文句をいい、素養のある幼なじみをねたんだりしたこともあるカリユである。

いまでは使えないものは使えないんだからしょうがないさ、と半ばあきらめの境地にいるが、それでも実際に目の前の魔法のすごさを見せつけられてしまうと心が揺れる。

ちょっとした場面をカリユは想像する。

突如、村に迫りくるモンスターの大群。領主からの援軍はなく、村は大人たちが懸命にあらがうが、敵の数は視界をうめつくすほどに多い。

誰もが絶望したそのとき、モンスターの一群が火に包まれる。

突然のことに驚き、周囲を見渡すモンスター。それを見下ろして、颯爽と登場する自分。そういう子どもっぽい空想だった。

八面六臂の大活躍を思うままに頭のなかにえがきながら、森をいくカリユはやがてゴブリンと遭遇したあたりにたどりついた。

彼らが隠れていたやぶのそばに、見おぼえのあるかがが転がっている。

その近くには、ジニと二人で午前中に拾い集めた木の実や、染色や小物作りに使える拾得物があって、赤色のなにかがもぞもぞと動いていた。

ぎよつと身体をすくめ、カリユは足を止める。

赤色のそれは生き物だった。

モンスター。小さい。翼が見える。トカゲを少し大きく、丸くしたようなその姿かたちについて、カリユは見たことはなかったが、話に聞いたことがあった。

「ドラゴン……？」

それは神話のおとぎ話や詩人の唄にでてくる、伝説のモンスターだ。

その羽ばたきが空をつくり、一吐きが火をうみ、こぼした涙から川が生まれたという。この世界をつくった存在と詠われる、それは想像上の生物であるはずだった。

それが、カリユの目の前にいる。

もちろん、それがドラゴンであるという確証はない。見たこともないのだからあたりまえだった。ドラゴンに子どもがいるなどという話も、聞いたことがなかった。

カリユのつぶやきが聞こえたらしく、そのドラゴンらしき見かけの生物が振りむいた。威嚇するように口をひらく、その全身が細かくふるえているのにカリユは気づいた。

「怪我、してるのか……？」

ぴぎゃー。応えるように鳴いた声が弱々しい。

カリユはそつと近づいた。すぐ近くに見下ろしたドラゴンの腹から青い血が流れていた。

やはり怪我をしている。それなりに深い傷に思えた。ドラゴンの近くには食いかけの木の実が散乱していて、傷を癒す力をたくわえるために、食べ物をとろうとしているのだとカリユはわかった。

首をもちあげてカリユをにらむようにしていたドラゴンが、それさえもおつくとばかりに地面に伏したのを見て、カリユは反射的に動いていた。

かごを拾い、そのあたりの木の实や葉っぱや木の皮を集める。そ

して、即席のベッドが作られたそのなかにドラゴンをかかえて寝かせた。

ピー、とドラゴンは暴れたが、すぐに大人しくなった。

カリユはかごを揺らさないように気をつけながら走り出した。

向かう先は村ではなかった。

ドラゴンは、モンスターだ。ゴブリンのように人を襲うという話は聞いたことがないが、悪いドラゴンやその退治話は、子どもの頃から寝るときによく聞かされていた。

そのドラゴンの子どもを連れ帰ったら、大人たちがどんな反応をするか。決して歓迎はされないだろう。もしかしたら、殺されてしまいかもしれない。

そんなことをさせるわけにはいかなかった。

大人たちに見つからず、ドラゴンをかくまえる場所におぼえがあった。

自分の命を救ってくれた冒険者。その去り際にかけられた言葉も頭には思いつかばず、カリユは懸命に手足をふった。

カリユが訪れたのは村のはずれ、ひっそりとたたずむ木小屋だった。

一目するだけでたてつけの悪さがわかる。小屋はここに住む人間が誰の助けも得られず、一人で立てたものだった。

扉を叩く。

声をかけたが、返事はなかった。かまわずカリユは扉をひき、室内に入った。

小屋のなかは薄暗かった。

まだ日が落ちていないのに暗いのは、小屋の立地と設計に問題があった。採光窓も閉められている。その奥、部屋の片隅に小屋の持ち主が壁に背を預けて座り込んでいた。

「ナオミ、大変なんだ！」

呼びかけられても、その相手はほとんどなんの反応も返さなかった。顔を持ち上げてカリユを見る瞳に輝きがないのは部屋が暗いせいではない。

ナオミという名の茶髪の女がカリユの村を訪れたのは、一月ほど前のことだ。

怪我をして、服装はぼろぼろで、その表情にはまるで生気がなかった。村の大人たちは彼女を歓迎しなかったが、金を払われては宿にとめないわけにはいかなかった。

陰気な女は、一週間ほど宿で身体を休めた。そのあいだ、誰かと言葉をかわすことさえなかった。ぶつぶつとよく独り言をつぶやいていて、それがますます村の連中を不安にさせた。

やがて、ナオミは村のはずれに住み着いた。小屋をたてる彼女を手伝う村の者はいなかったが、やはり文句を言う大人はいなかった。ナオミと話す村人はカリユだけだった。

というより、ナオミに話しかける村人がカリユだけだった。ナオミのほうからはカリユに声をかけたこともなかった。

カリユはナオミの秘密を知っていた。

以前、森で助けてもらったことがあるからだ。今日彼を助けてくれた冒険者のように、ゴブリンに襲われて危なかったカリユは、ナオミがモンスターを一撃でほうむりさるところを見て、その見事さに心をうばわれた。

ナオミは冒険者だった。

本人の口からきいたわけではないが、ゴブリンを叩ききった動き

はただの素人のものではありえなかった。

世界を股にかけて旅をする冒険者が、どうしてこんな辺鄙な村にいて、一人で外れに住んでいるのか。聞きたいことはたくさんあったが、ナオミはほとんどなにも言わなかった。声を聞いた事も、ほんの数回くらいしかない。

今ではカリユのほうでも、無理をして事情を聞こうとはしていなかった。

そんなことをしなくとも、彼にとってナオミが命の恩人であることは変わらないからだ。友達だとも思っていた。そして、もつとも身近にあこがれる存在でもあった。

ナオミはいつもそうしているように、部屋のなかで呆然と暗闇を眺めているような表情だった。かまわずカリユは続ける。

「水と、包帯ある？ 怪我、してるんだ」

ナオミの反応はない。カリユは言った。

「ドラゴンなんだ！」

ぴくり、とナオミが震えた。

「ドラゴン」

「そう、ドラゴン！ 森で見つけて、怪我してるんだ！ 水と、包帯をちょうだい！」

ナオミがのろのろと起きあがった。

近くの棚から布を取り出し、水入れの桶を持ってくる。

「ありがとう」

礼を言っ、カリユは布を水にひたして、そつとドラゴンの傷をぬぐった。

びびり。

「ごめん、ごめん。ちょっと我慢してよ」

ドラゴンの苦情を聞きながら、血を綺麗にぬぐって布を洗い、怪我のあたりに柔らかくおしあてる。止血の効果くらいはあるかもしれないなかった。

「どうしよう。ナオミって、回復魔法とか使えたりしない？」

カリユが手当てをする様子を黙って見つめていたナオミは、小さく首を振った。

そっか、とカリユはため息をはく。ナオミが魔法を使えるとは聞いたことがなかったが、もしかしたらと思ったのだった。

回復魔法を使えるほどの魔法使いは少ない。村には一人もいなかった。

ふと、カリユは昼にあつた魔法使いのことを思い出した。それと同時に、違うことも思い出す。

「竜」

竜を見なかったかと聞かれた。あの人が探していたのはこのドラゴンのことなのだろうか。

でも。近くには、他には誰もいなかったけれど。

「竜」

繰り返すように、ナオミが言った。

隣の彼女をあおぎみて、カリユははじめてナオミの異常な様子に気づいた。

それまではいつも、どんなことにも反応をかえさず、抜けがらのようにだったナオミが、食いいるような形相でかこのなかのドラゴンを見つめている。

「うん。すごいよね。俺、はじめて見るよ」

はじめて見るナオミのはっきりした反応に嬉しくなって、カリユは笑いかけた。

ナオミは声が聞こえない様子で凝視している。

その唇がなにかをつぶやいているが、カリユには聞き取れなかった。

「……大丈夫かなあ。こいつ、怪我が深いみたいだけど」

伝説のモンスターといわれるドラゴンへ、どういった手当てが有効かなど知るはずがない。ドラゴンの体力に期待するしかなかった。食べ物、かごのなかにある木の実でよいだろうか。

「ナオミ。こいつ、ここでかくまってもらえない？ 村だと多分、大人たちがうるさいから」

ナオミがカリユを見た。

あんまりにも見かけに気をつかっていないけれど、髪を切つて櫛をいれて、綺麗な服を着ればナオミは絶対に美人だとカリユは思っていた。

だつてほら、すぐくまつげが長い。少し濁つたような半透明の視線を受けて、どきりとする。返事のないままにナオミはカリユから視線を外した。

それをカリユは了承であると受け取った。

「それじゃ、よろしくね。俺、様子を見にくるから。パンかなにかも持つてくるね」

カリユはこれまでに度々、ナオミにそうした差し入れを持ってきていた。

ふたたびドラゴンに視線を向けたナオミに声をかけて、カリユは扉に向かった。

村に戻るのが遅くては心配されてしまう。

かごはドラゴンの寝床にあてがわれているから、それをどうジニイに説明しようか考えながら、カリユはナオミを振り返った。

「それじゃ、またね！ ナオミ」

返事をたしかめず、小屋から出ていった。

ナオミと呼ばれた女は、少年がいなくなったあとも一人、じつとドラゴンを見下ろしたまま動かなかった。

その唇がなにかをつばやいている。

やがて、そこから伝播するように、女の肩や手、全身が震えだした。

なにかをつばやき続ける、その表情に浮かんでいるのははっきりとした恐怖の感情だった。

その夜。

カリユの村のまわりにひろがる森で火事が起きた。

はじまりの日 4

夕暮れが一足はやく森にかげりをしのばせる。

村はずれにたったほったて小屋で、その小屋の持ち主の女はがたがたと震えていた。

室内はほとんど夜のよう暗い。

小屋の中央、斜めにかしいだ机のかごに横たわるもの。そこからほのかな光がたちあがっている。

苦しそくに腹を上下しながら、小さなドラゴンは呼吸をくりかえしていた。

全身を発光させているのは、呼吸ごとに力をとりこんでいるからだ。

マテルと呼ばれるこの世界にみちた力。どこにでもあり、いくらでもあるその源を、小さな生命体は身体の回復にあてている。

魔法ではない。そう意識するほどのものでもない。

彼らにとつてそれを活用する術は、呼吸するのと同じくらい自然に、生まれつきそなわっているものだった。

あたりまえだった。

なぜなら、彼らはマテルそのものなのだから。

震えながら見守るうちに、ドラゴンはますますその輝きをまじえてきている。

赤色のマテルはドラゴンの属性をあらわしていた。

火の竜。力のサラマンデル。それはこの世界をつかさどる存在だった。

ちまたでは伝説としか噂されないが、それが実在することは冒険者たちのあいだでは常識だ。

彼らの目的は多くがその存在にあった。

たくさんの冒険者がそれを探し、それと戦った。

ドラゴンに挑んだ冒険者の数はそのままそこで積み重なった死者の数にひとしい。

彼らは叫び、悲鳴をあげ、笑いながら命を散らせていった。

雪辱の呪いを吐き叫び、塵のようにあっさりと命を散らしていく。それが冒険者という人種だった。

竜がそうした存在であるように、彼らもまたそういう存在だった。

女は違った。

歯を打ち鳴らして恐怖におののくその目に過去の光景が思い浮かんでいる。

天をさき、地をくだき、海をわるその異能。

目の前に立つただけで魂ごと心胆をけずりとられるその圧倒的な存在。

頭をかかえて神の慈悲をとなえ、ただ周りの仲間が事切れる断末魔だけをきく。

気づけば女は逃げ出していた。

恐ろしかった。ただ恐ろしかった。

そうして流れ着いた村。すべてを放り出してたどりついたその逃げた先で、いま女の目の前にそれが横たわっている。

逃げ出すことなどできないのだ。絶望の気分で女はつめく。

そうだ、それはそうだ。だって、なぜなら、彼らはこの世界そのものなのだから

ドラゴンの視線がさまよい、彼女を見た。
口を開く。

ひ、と息をのみ、女はとびすさって尻餅をついた。

ぴー。

灼熱の炎が吹き荒れることなく、かわりにか弱々しい声がないたのろのろと立ち上がり、女はかこの様子をうかがった。

ぴー。またドラゴンがないた。はかない声だった。

お礼をいつているようにも、助けをもとめているようにもきこえ
た。

女は呆然とそれを見下ろした。

信じられなかった。

あのドラゴンがそんなか弱い声をだすことに、耳をうたがった。

ドラゴンと目があつ。そこにあつたのは他者をみとめる視線だっ
た。

彼女を見下ろして蟻をふみつぶすように無機質な瞳を向けていた
あの生物が、自分を見あげている。

それは彼女のなかに凝り固まった恐怖をやわらげるのに十分だっ
た。

女の頬を涙がつたって落ちた。

なぜ自分が泣いているかわからなかった。

そつと手をのばす。ドラゴンに触れた。

火竜の子は抵抗しようとしなかった。その力がなかったただけかも
しれない。だが理由はどうあれ、たしかに女はその身体にふれた。

温かい。
鼓動がした。

凍土の氷がとけるように、女のなかでなにかがくずれた。

ああ、そうか。

彼らも同じなのだ。そしてこんなにも違う。そう、違うのに、同じなのだから。

なら、自分だってきつとこうなれるはずだ。

女は笑った。

滂沱のごとく涙をながしながら笑った。喜びと悲しみがなймаぜになった表情だった。

しばらくして、室内を完全な暗闇がおおいつつんだ。

深夜、父親の手でたたきおこされたカリユは、すぐに異様な雰囲気
気に気づいた。こわばった父親になにかあったのかもたずねられず、
村の外、寄り合いなどに使われる広場に向かう。

そこにはすでに他の村人たちが集まっていた。

空をみあげたカリユは目をみひらいた。村の周囲、あちこちの方
角が明るかった。

「カリユ……」

ジニイがそばにやってくる。寝起きだから髪がおりている。

不安そうに服のすそを掴んでくる幼なじみの手をにぎって、カリ
ユは大人たちの様子をうかがった。

誰もが混乱していて、口にする言葉はどれも錯綜していた。カリ
ユは村長の姿をさがした。

「みんな、聞いてくれ！」

声を張り上げたのは村長ではなく、若い村人のでリーダー各になつてゐる男だつた。

「森火事だ！ どうも一箇所じゃないらしい！ このままじゃ森が危ない。風の吹き方によつちやあ、村も巻かれるかもわからん！」
ざわざわと村人がざわめいた。

「理由はわからん！ 今日、子どもたちがゴブリンを見かけたつて話もある！ もしかすると、モンスターの群れの襲撃があるかもしらん！」

いつそう強いざわめき。

大人たちがカリユとジニイを見た。

なかには非難じみた眼差しもある。昼間の出来事が、この事態を招いたのではないかと思つてゐる相手がいた。

大人たちの視線から守るように、カリユはジニイを自分の背後にかくした。

「まだ間に合うようならだが、森をまもらんといかん！ モンスタアの襲撃に備える必要もだ！ 男たちは二手にわかれてどつちかを頼む！ 子どもは万が一のために、家の荷をまとめて避難の準備をしてくれ。それぞれの指示は自警団がとる。警団、班分けするか集まれ！」

大人たちが動き出す。

心配そうなジニイにうなずきかけて手を放し、男たちのあとに続こうとしたカリユは、父親の手で頭をおさえつけられた。

「お前はあつちだ」

父親がそうあごをしゃくつたのは、女子どもが集まりだしている場所だつた。

「俺、子どもじゃないよー！」

むっとして見上げるカリユに、無愛想で評判の父親は静かにうなずいた。

「わかつてる」

頭をくしゃりとして、

「お前はジニイを守れ。母さんを頼む」

まだ納得できない様子でいる息子に言った。

「男だろう」

「男だよ！」

父親の大きくて重い手を頭からふりはらい、カリユは言った。

小さく笑った父親が、ぽんぽんと頭を叩いてなでた。

「なら、頼むぞ」

「……わかった」

不承不承、カリユは返事をして父親の背中を見送った。

ぎゅっと拳をにぎりしめる。

もっと背が大きければ。力が強ければ、ぼくだって

ぎゅっと彼の手をつつんだのはジニイだった。

怖いだろうに、それを我慢している。必死に年上らしくあるうと
しているのだった。

カリユは大人たちと一緒にいけなかった残念な思いをおさえつけて、自分が父親にされたように幼なじみの頭をなでてやった。

気が強くてしつかり者。だけど本当は怖がりな彼の幼なじみは、
泣きそうな表情で目を細めて、それをごまかすように強く手をにぎりしめた。すごく痛かった。

自分のできることをしよう。

そうカリユは自分に言い聞かせる。いつか父親のように背も伸びて、手も大きくなるんだから。

今は隣にいるこの幼なじみの小さな手を守っていよう。ふと脳裏
になにかがよぎって、カリユは空をみあげた。

星がきれいな夜空。四方がうつすら赤い。

はっとカリユは思い出した。

「ジニイ、ごめん。俺、ちょっと行ってくる」

「え？ あ」

「すぐ戻るから！ 大丈夫って、母さんについてて！」

「カリユ！」

幼なじみに手を振りながら、村はずれに走った。

小屋は炎に包まれていた。

巨大な焚き火となつて、轟々と火の粉をまきちらしながら燃えている。その手前に、立ち尽くしている人物がいた。

「ナオミ！」

声をかけながら、カリユは自分の勘違いに気づく。

小屋の手前、炎に照らされた濃い影のようなその相手は、立ってはいたが尽くしてはいなかった。

笑い声がひびいていた。

はじめて聞く、とても楽しそうな笑い声。

それを耳にしたカリユはなぜか嫌な予感をおぼえた。

「……ナオミ？」

女が振り返った。

輝くような笑顔だった。逆光のはずなのに、カリユにはそれがはつきりと見えた。

「ああ、カリユか。どうした？ こんな時間に」

はきはきとした口調にとても違和感がある。

「火事、いや、そうじゃなくて、小屋が！」

「ああ これか。いや、いいんだ」

爽やかな表情で彼女は言った。

「もつからないからな」

「いらないうって」

絶句して、すぐにカリユはそれどころではないことを思い出した。

「ナオミ、あいつはっ」

「あいつ？」

「今日のお昼、連れてきたドラゴンだよ！ まだ中にいるのっ？」

不思議そうな小首をかしげるのに、苛々としながら訊ねる。

ああ、とうなずいてナオミは答えた。

「あいつならここにいる」

「そうなんだ」

ほっとして、すぐにカリユは顔をしかめた。

ナオミのそばのどこにも、かごも、ドラゴンの姿も見えなかった。

「……どこ？」

「だから、ここだ」

ナオミは自分の胸に手をあてて言った。

服のなかに隠してるんだろうか。おもわずまじまじとふくらみを見てしまつて、そんな馬鹿なカリユは頭をふつた。

「……えっと、どういう意味？」

「察しが悪いやつだな」

朗らかに微笑んで、ナオミは答えを口にした。

「あいつは、私が食べたよ」

「え？」

間の抜けた声をかえすカリユに、ナオミは手を差し出した。上向きでのひらに、灯りがうまれる。赤い火だった。

「ふふ。力ある言葉もいらな。すごいな」

楽しげに言う彼女の口元、灯りに照らされたそこが青色にぬれていて、カリユは気が遠くなるのを感じた。腰が砕けてへたりこむ。

「どうした、大丈夫か」

ナオミが近づいてきてカリユを立たせてくれた。温かくて、力強い手。

その温かさは、彼女のものではないような気がカリユにはした。

「本当に。食べちゃった……の？」

ナオミは満面の笑みでうなずいた。

「ああ。食べた」

聞き間違いではありえない。ふたたび、カリユは地面にへたりこんだ。

「どうした。怪我でもしてるのか」

「怪我って」

怪我してたのは、あいつだ。あのドラゴンだ。

だから連れてきた。かくまってもらおうと思って。村じゃ怒られるから、ナオミの家なら安全だと思って

「ステータスに異常はないようだが。どうした、カリユ」

「どうしたじゃないよ！」

カリユは声をはりあげた。

「なんで、そんな。食べたって、どういふとき、ナオミ！」

きよとんとして、ナオミは綺麗なまつげをまばたかせた。

「なにを怒ってるんだ？」

不思議そうに続ける。

「ドラゴンだぞ。あれがどういう存在か、お前たちだって知ってるだろう？」

「そう、だけど。だけど、食べたって……」

「お前たちも牛や豚を食べる」

「そうじゃないよ！ だって、友達なのに！」

「友達？ ドラゴンが？ おかしなことを言うやつだな」

くつくつとナオミは笑った。

とても綺麗な笑みだった。やっぱり、ナオミは美人だった。だからこそ、カリユはそれがとても恐ろしく思えた。

「ああ　ドラゴンだけでなく、私もそうだと思ってきていたのか。カリユ、お前は優しいな。そして変わってる。はじめて会うよ、お前のようなのには」

そつと頭をなでられて、カリユは後ろにさがってそれから逃げた。ナオミは笑い続けている。

「でも、それは勘違いだ。ドラゴンには友達にはなれない。私だってそうだ」

カリユは顔をしかめた。

「なんで、そんなこと言うんだよ」

「違うからだ」

ナオミは言った。

「ドラゴンとお前は違う。私とお前も、違う。それなのに、友達になれるはずがないだろう。互いのことがわからないのだから」

「そんなの！」

「わからないじゃないか　か？　いいや、わかる。試してみようか。指定。ララパタ村はずれの小屋。対象2」

ナオミがなにかを口にした次の瞬間、カリユは大きな力で吹き飛ばされていた。

悲鳴をおしこころして、受身を取ろうとする。予想した痛みがいつまでたつてもこなかった。目を開ける。

ナオミの姿が遠くになっていた。正しくは、カリユのほうで遠くになっていた。

一瞬で、十メートル近く飛ばされている。痛みも、衝撃もなにもなかった。魔法？　そつとしながらカリユは立ち上がった。

「魔法ではないよ。設定だ。これでもうお前はそこから近づけない
できるならやってみせてくれ。もしできたら、抱きしめてあげる」
なにをいつているのか理解できなかった。

カリユは足を持ち上げて一步を踏み出そうとして、宙でからぶつ
て態勢をくずした。

あわててバランスをとるが間に合わない。その場で転んだ。前の
めりでなく、後ろに尻餅をついて。

「……え」

転んだまま、足をのばす。

そこにはなにもない。壁も、力もかかってないのに、足がそれ以
上すすまなかった。

まるで見えない壁があるように。というよりは、身体が先にいく
のを拒んでいるような感じだった。もう一人の自分が、勝手に身体
に命令をだしているような。

魔法でない。理屈ではなく、カリユはそのことを理解した。これ
はそんなものではない。

「それがお前という存在の限界だ。カリユ・フィート。職業・村の
子ども。Lv3。装備・布の服。手製の投石紐。備考・わんぱくだ
が正義感の強い、素直な少年。父親のように立派な獵師になること
を夢見ている。隣の家のジーニアスとは生まれながらの幼なじみで、
なにかにつけて年上ぶる彼女を少々うつつとうしく思っているが、大
切にも感じている。……ふふ、可愛いな。しかし、今じゃこんなの
まで見れるのか」

「な、」

「なにを。お前のステータスだよ。カリユ」

炎を背にしてゆつくりとカリユに近づきながら、ナオミは言った。
「元々、お前たちのステータスは表示されていたが。しかし、隠さ
れていたソースまで見れるというのは、凄いな。ちょっと量が膨大
すぎるが。……ああ、お前は本当に私を大切に思ってくれていたの

だな。嬉しいよ、カリユ」

頭をなでた。

カリユは動けなかった。

前に進めないのはなにかの力がかかっているからだっただけだ。

なら、後ろにもいけないのは？

それは間違いなく、目の前の相手が怖かったからだ。

いまさらのようにカリユは気づいていた。ナオミはさっきから、ぼくが心で思っただけのことを口にしてる……！

「そう。私にはお前の全てが見える。震えているのも。その理由も。それが私とお前の違いだ、カリユ」

手を離して立ち上がり、彼女は言った。

「自己の存在に悩まず、ただ与えられた役割を果たす。我々の行動に異を唱えられず、許可された場所にしか足を踏み入れることもできない。そういうものなんだ。だからお前はそこから進めない。今さっき、私が小屋周辺への接近を禁じたからな」

その言葉は、ひどく冷たい声に聞こえた。意味はわからずとも、あまりに容赦のないものであるように思えた。

哀れみの表情で見下ろしている。

それが無性にくやしくて、カリユは全身に叱咤して立ちあがった。ナオミに掴みかかろうとする。しかし、彼の足は根がはえたようにびくりともその場から動かなかった。

「……怒っているな。だが、それもすぐに消える。お前達は逆らえない。怒りを持続できない。そうして生を繰り返す、かわいそうなあやつり人形なのだから」

ナオミの伸ばした手がカリユの頬をなでた。愛しさのある仕草だった。

向こうから近づいてきたのなら、動ける。

カリユはナオミの手に噛みついた。広がった奇妙な味わいに口を離して、そして声をうしなった。

噛みついた手のひら、その傷から青い血が流れていた。

あの小さなドラゴンが流していた血の色だった。人の血ではなく。

痛みなどまったくないという平然な顔のまま、ナオミが優しくげに言った。

「お前は優しくかった。すごく優しくかった。だから、お前の記憶には触れないでいくよ」

腕が伸びる。

やめる、と抗うことはできなかった。金縛りにあったように身体がうごかない。

そつと額に触れるあたたかな手のひらにすくわれて、カリユの意識は闇におちた。

絶望にも似た別れの台詞が聞こえる。

「……さよなら、優しいNPC」
カリユ

少年のたびだち 1

カリユは自分の部屋で目を覚ました。

夢だったのか。寝ぼけた視界で天井を見ながらそう考える。
左手をみる。

そこには包帯が巻かれている。にぎると、ずきんと痛んだ。

夢じゃない。

ゴブリン。変なしゃべりかたの魔法使い。小さなドラゴン。火事。
ナオミ。そして

……自分はどうかやって家に戻ってきたのだろう。火事は？ 村は、
いったいどうなったのだろう。

いろんなことを頭に思いうかべながら、カリユは部屋をでた。

でたらすぐそこも部屋になっていて、三人の姿がある。父親と母親、もう一人。母親はキッチンで朝ごはんの準備をしていて、あとの二人は暖炉前のテーブルに腰かけていた。

「おはよう」

いつものように無言の父親と、背中をむいた母親に挨拶をして、顔をあらってこようと外の井戸に向かいかけて、扉に手をかけとこるでカリユは違和感のしつぽをふんづけた。

振り返る。

「ずいぶん遅いお目覚めじゃな」

銀色の髪と褐色の肌をした見知らぬ誰かがそこにいた。

いや、知らない相手ではなかった。昨日、カリユを助けてくれたあの魔法使いにちがいなかった。

「な、なっ」

「なんでここにおるかと言われてもの。招かれたから泊まっただけ

よ

招かれた？

父親が立ちあがり、カリユのちかくにやってきた。げんこつをおとす。

「痛っ！」

目の前に星がとんだ。

しゃがみこんで頭をおさえるカリユに、静かに怒った声がふつてきた。

「……昨日、村はずれで寝ていたお前を連れて帰ってきてくださったんだ。ちゃんとお礼をいいなさい」

「そう、なの？」

もう一発、げんこつがおちた。

「そうなんでゴザイマスカ」

涙目になりながら見あげたカリユに、銀髪の魔法使いは涼しげな表情でこたえた。

「でかい火のそばで気持ち良さそうにしていたのを、たまたま見つけただけじゃがな」

「火……」

「そうだ。森の火事も、この人が魔法ですべてしずめてくださった。町を救ってくれたんだ」

魔法。火をつけることができるなら、反対のことだって消すことだってできる。

ゴブリンをあんなに簡単に倒した魔法使いなら、たしかにそのくらの魔法はつかえても不思議はなかった。

尊敬の表情であおぎみるカリユに、相手は照れもない態度で、

「探しものをしていたついでよ。褒められるようなことはしとらん」

「それでも、私たちの村は救われましたから。カリユのことも。本当に、ありがとうございます」

お盆を持ってテーブルにやってきた母親が、深々と頭をさげた。父親がカリユをにらむように見る。母親を手つだつてご飯を並べていたカリユは、あわてて頭をさげた。

「ありがとうございますましたっ」

すぐに頭をあげた。せきこむようにたずねる。

「あの！ 俺がいた近くに、他に誰か」

ずっと魔法使いの切れ長の瞳がほそまった。

「他には誰もおらんかったが」

「……そう、ですか」

カリユの脳裏に声がよみがえった。 さよなら。

いつもより豪華な朝食がはじまった。

食事のまえのお祈りのあいだ、カリユはじつとテーブルを見るようにしていた。

それを向かいにすわった魔法使いが、醒めた眼差しで眺めている。

「ごちそうさま」

ほとんど食べ物にてもつけず、カリユは立ちあがった。

「ちよつといってくる」

「カリユ、待ちなさい。こちらの方が、お前に聞きたいことがある
つて」

母親の声がかかるまえに、カリユは扉から飛び出していった。

はあ、とため息をついた母親が、すまなそうに客人をみている。

「すみません。落ち着きがない子で」

「なに、子どもはあれくらい元気なほうがよからう」

スープを美味しそうに飲みながら、魔法使いは笑った。

「昨日も、女の子をまもろうと身体をはっておったよ。よいおのこ
じゃな」

「そうですね」

嬉しそうに母親の口元がほころんだ。無言で食事を続けている父

親はなにと言わないが、内心でよろこんでいるようだった。

父は寡黙だが誇りだかく、母は穏やかでやさしい。それこそはぐくんだ性格であることは違いなかった。それが例え、そうあるべきで定められたものであるとしても。

質素だが心のこもった食事をあじわい、魔法使いは席から立った。

「馳走じゃった。さて、少しわっぱを借りてもよいか」

「それはかまいませんけれど、あの子がどこにいったのか……」

「こちらで探すのでかまわん。見当はついておる」

横がけたフードをとりながら、こともなげにいった。

家を飛びだしたカリユは村のはずれにやってきていた。

昨日までほったて小屋がたっていたその場所。今は火事のあとが痛々しく、すべてが焼け落ちてしまっている。

そこに一步を踏み出そうとして、やはりある場所からはまるで身体が前に進まなかった。

「くそ」

どこか抜け道はないかと小屋のまわりを一周する。

そんなものはなかった。はかったように、円状に見えない壁がたちふさがっているようだった。

「くそ！」

ふりおろす。痛みも、なにかに触れた感覚もなく、くぶしは宙で止まった。

カリユは思いつく。穴をほつたらどうだろう。

モグラみたいにもぐっていけば 地面を掘り起こそうと手を伸ばしかけるカリユに、冷やかな制止の声がとどいた。

「やめておけ。爪がはげる」

振り返ったそこに、フードをかぶった魔法使いが立っていた。

カリユは黙って、道具になりそうなものがないか探した。スコップをとりかえ、石かなにかでもいいから近くに落ちてないかと見回して、魔法使いに笑われる。

「やめておけと言つとるうが。いくら掘つても無駄じゃ。禁止フィールドは目に見えるところだけではない。上からだろが、下からだろが、ぬしはそこから先には進めん設定よ」

カリユは動きをとめて、たたずむ魔法使いを見た。

たつたいま投げかけられた、意味のわからない言葉を思いかえし、わけがわからないことをあらためて確認して、わからないまま納得した。

低い声でたずねる。

「……あなたも、ナオミと一緒になんだ」

魔法使いは首をかしげた。

「どうかの。それはちと難しい質問かもしれん」

「せつていつて。なんですか」

とぼけるような相手の態度を無視して、カリユは質問をつづけた。

「えぬびーしつて、きんしつて。なんで。なんでナオミがあんな」

「
青い血。」

ぶるりと身体をふるわせたカリユに、魔法使いがいう。

「見たとおりよ。噛みついたときにお前が感じた、それが答えじゃな」

この人も、ぼくの心をよんでる。ナオミのように。

「そう警戒するな。少しばかりおぬしに聞きたいことがあるだけよ。かわりに、ぬしの聞きたいことにも答えてやる」

「……どうして？ 心が読めるなら、わざわざそんなこと聞かなく

たつて」

「文字だろうが数字だろうが、羅列は羅列。そこに意味をつけるのは人。わしが読めば、それはわしの答えでしかない。最適解が正解ともかぎらん。まして人の心、たずねて聞くのがもつとも誤差がない。当然、主客をあらかじめ限つたうえで話じゃがな」

変なしゃべり方のせいもあって、魔法使いの台詞の意味はほとんどカリユにはわからなかった。

ただ、この相手が自分と会話をしたいのだなということとは理解できた。

「聡いわつぱじゃな。ほれ、こつちこい。膝枕してやろう。好きなものじゃろ」

「なっ」

突然そんなことを言われたカリユは声をうしなう。母親に膝枕してもらうことが大好きなのは、誰にもいってない。ジニーにだって内緒だった。

顔を真っ赤にするカリユをけらけらと笑い、魔法使いは芝生に腰をおろした。

「母御のそれには叶わんじやろうが、わしの膝もなかなかぞ。……左手の傷をみるだけよ、とって食いはせんわ」

手招きされるのに導かれてふらふらと、カリユは魔法使いのもとへ寄つていった。

やわらかそうな太股を見てためらつて、覚悟をきめた。ごろんと寝転ぶ。藁のベッドとはやわらかさもあたたかさもなにもかも違う弾力。あきれたような声があふってきた。

「なんじゃ。やっぱりしてほしかったんか」

「……ちがつ」

あわてて起き上がろうとしたのを、やわらかい弾力でおさえつけられた。

「力をぬけ。ぬしのかわいい幼なじみには黙つておいてやろう」

「……………！……………っ！」
ばたばたと暴れて、それでも逃げ出せないのがわかって、カリユは陸にあげられた魚のように脱力した。甘い匂いがした。かぎなれた母親のものとは違う。なんだか眠たくなるような、不思議な香りだった。

持ち上げられた左手の包帯をはずされる。

「いくら低温でも、ああも強く握りしめればこれくらいにはなるか。ようもまあ、あんな無茶をしたものじゃの」

「……………だつて、ほかに武器が」

「褒めておる。まあ、そのあとの行動はいかんかったがな」

「……………」

魔法使いがさつと手をなでると、そこにあつた傷が消えた。

言葉の通り、魔法のようだった。呪文もなかったのに。

痛みもない。さつきまで怪我をしていたということさえわからなくなっていた。

ぼかんと自分の手のひらを見上げて、カリユはそれから顔をしかめる。それを魔法使いが上からのぞきこんでいた。

「どうした？ 嬉しくないかよ」

カリユは自分の手をにぎりこんだ。

「……………なんか。消えちゃうみたいで」

痛みと一緒に、昨日の出来事が。ドラゴンとの出会いも、ナオミとのお別れも、ぜんぶ嘘だったんじゃないかと思えてしまうのが、カリユには怖かった。

「忘れてしまったほうがよいこともあるう」

魔法使いの言葉はやさしかった。

「そんなことない」

カリユはこたえる。

「そんなのイヤだ。ぼくは、忘れたくなんかない」

あのドラゴンも、ナオミも。

すぐに消える。お前達は逆らえない。怒りを持続できない。そうやって生を繰り返す。

ナオミはそういつていた。だけど、ぼくは絶対にわすれない。そう決めた。

じわり、となにかが視界ににじんだ。

「やはりぬしは、よいおのこじゃ」

そつと目のうえに手のひらがかぶさる。

「すまん。勝手をした。よけいなことであつた」

カリユはだまって頭をふつた。

顔におかれた手のひらはあたたかくて、母親のものとも、幼なじみのものともちがつた。ナオミのに似ていた。

ぐつとこらえようとしたりカリユに、やさしい声があがした。

「泣いてしまえ。まだ泣いておらんのだらう。よいおのこはな、よう泣くものよ」

嘘だ。男は、泣いちゃいけないんだ。

そう思ったけれど、声があまりにもやさしすぎた。

名前もしらない魔法使いのひざで、カリユは声をあげて泣いた。

「……聞きたいことつて、なに」

おもいっきり泣いてから、カリユはいった。

少しはずかしかった。ぶっきらぼうな口調はその照れ隠しだ。

「うむ」

そんなカリユの気持ちなどそしらぬふうに、少年の髪の毛をいじりながら魔法使いはいった。

「昨日まで、ここ的小屋に住んでおつた冒険者が、身に竜をやどし

た。それで間違いないか」

カリユはうなずいた。

「その冒険者は一月ほど前にここに現れたそうじゃの。村人と近づこうとせず、一人でここに住んでおった」

「……うん。ナオミと話すのは、ぼく　俺くらいだった。村の大人も、近づいちゃいけないって」

ジニイも、カリユがナオミに会いに行くのをすごく怒っていた。だからカリユはナオミに会いに行くとき、こっそりと会いにいった。

「ふむ。……ぬしが森で見つけたドラゴンをつれていったときのこただがな。その冒険者は震えておったようじゃの」
「どうだっただろう。」

あのとときはドラゴンの怪我のことで頭がいっぱいで、そこまではおぼえていなかった。

「他ならぬ、ぬしの記憶に聞いたことよ。間違いない。わしが聞きたいのはそこじゃ」

一拍の間をおいて、魔法使いはいった。

「その女、どうして震えていたと思う？」

「……わかんないよ、そんなの」

「わかる。いや、ぬしにしかわからん。考えてみよ」
強い口調だった。

カリユは目を閉じて昨日のことを思いかえす。

ドラゴンを見たときのナオミの表情。いつものようにぼうつとした態度で、ふらふらと近づいてきて　ああ、確かに手当てをしているあいだ、隣でじっとドラゴンを見ていた。なにかつぶやいていた。それがなんといっていたかは、わからないけれど、

「……怖がってた」

「なにを」

「ドラゴン」

いや、そうじゃない。自分のつぶやきをカリユは否定した。

「……たくさん。多分、いっぱいなんだと思う」

村とかかわるうとしないで一人で村はずれにいたのも、ずっと小屋のなかにこもってたのも。

ドラゴンが理由なんじゃない。あのドラゴンは多分、その一つだ。

魔法使いが深い息をはいた。

「なるほどの。だからこそ、自分がそれになることを望みおったか。無茶なことをしよるわ」

笑っているような、怒っているような声だった。

カリユののどをくすぐり、それをいやがって身をよじった拍子に魔法使いが立ち上がる。

「ぬしの考えで恐らく間違つとらん。わっば、感謝するぞ。聞いたいことはそれだけじゃ」

どこかいこうとする背中に、あわててカリユは声をかけた。

「まって！ まだ、聞きたいことがあるのに！」

「……ああ、そうだったの。すまん、ありゃ嘘よ」

あっさりと魔法使いはいった。

「嘘、って」

あまりに堂々と言われてしまい、カリユは二の句がつけない。

フードの縁からのぞく涼しげな目元を草原の風にゆらして、魔法使いは笑った。

「というのは冗談じゃが。だが、聞かんほうがいい。聞いたら、きつとぬしは帰ってこれんくなる」

「帰る？」

「向かうために、聞くのであるっ」

ぎょっとしかけて、すぐに気をとりなおした。

自分の考えを読まれているなら、隠したってしょうがない。それで怯える理由もない。

「……ナオミを、探したいんだ」

「探してどうする。違う、といわれたのじゃろう」

「だから。なにがちがうのか、教えてもらって。考えて」

「聞いたところで、事実は変わらない」

魔法使いはいった。

「諦めよ。ぬしはわしらとは違う。このまま村で大きくなれ。命と、両親と、幼なじみを大事にせい。そのほうが幸せよ」

「イヤだ！」

カリユはいった。

ただつこの態度だった。それに続いた行動がちがった。

カリユは地面に目をやって、手ごろな大きさの石をさがした。それをひろって、その鋭利なかどで左の手のひらを切り裂いた。

魔法使いが小さく目をみひらいた。

激痛がはしった。涙がにじむ。手のひらから鮮血が流れた。二回、三回、と傷のうえからさらに切り刻んで、カリユは涙目のまま、真っ赤に染まった手のひらを魔法使いにつきつけた。

「絶対に、わすれない。忘れてなんかやるもんか！」

二人はしばらくにらみあった。

上から見下ろす静かな眼差しと、下からにらみあげる涙のたまった視線がからみあい、先に根負けしたのは魔法使いのほうだった。

「見上げた頑固者じゃ」

呆れたようにいい、空をみあげる。

思案するようにはしばらくそのままの姿勢で、それからカリユに顔をむけた。

「……帰れんぞ。ぬしは今までのぜんぶを捨てることになる。村も、やさしい両親も、かわいい幼なじみも。ほんにそれでいいんじゃない」

ずきんずきんと、まるで手のひらに心臓があるみたいに痛みが脈をうつっている。

その痛みを丸ごとにぎりしめて、カリユは大きくなずいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8653x/>

君はNPC？

2011年10月28日12時25分発行